

日本脂質生化学研究会

報 會

1982年2月

日本脂質生化学研究会

(J C B L)

日本脂質生化学研究会と安田守雄先生

原 一 郎

本会名誉会長安田守雄先生は長らく病氣御療養中であつたが、昭和56年3月4日御逝去になり、3月7日中野の慈眼寺で葬儀が行われ、私が本会を代表して弔辞を読んだ次第です。

安田先生は、第5回国際脂質生化学研究会が昭和35年7月20～23日マルセーユで開催された折、これに出席され、アメリカを経由して帰国されましたが、これを機会に日本の脂質生化学の研究を国際的に結びつける必要を感じ、安田先生に国際会議のお話を伺うべく、10月31日(日本生化学会総会が日本医大で開催されていました)に東大正門前の向上会館に有志が集まり、日本脂質生化学研究会の設立にこぎつけた訳です。会するもの約70名、安田先生に会長をお願いして事務局を東大農学部農芸化学科の舟橋教授の所に置いて発足いたしました。

安田会長の最初のお仕事は会規を作ることであり、昭和36年3月15日会長名で会規案を幹事の諸先生にお送りしました。これで現行会規の原型ができましたが、役員の任期等に関しては触れておりません。現会規と異なる点は最初は日本生化学会総会の時期に研究会を行うという点であります。ついで5月31日付で会費の納入(100円)と第一回研究集会のアナウンスを行い、ついで6月17日日本化学会講堂にて第一回研究集会を開き(当時は研究会と云わず研究集会とつゝましやかに表現した)、講師は野田万次郎氏、赤沢堯氏、丸尾文治氏、千原呉郎氏、高橋善弥太氏で、これに安田先生の“脂質研究の動向”という講演があった。(但しこの集会は日本生化学会総会の時期と完全に外れている。また、舟橋事務局長の詳細なメモには講師謝礼が赤字であると記されており、現状とは今昔の感がある。)

また5月25日現在での会員の名簿が出来ており、これが、しばらく非常に有効でありました。この会員名簿によると会員数は110名であるが、現在この時の方でなお会員である方は33名です。現在の会員の方々は大部分が若い新進気鋭の方々であると考えて良いのではないのでしょうか。

このようにして本会はその後順調すぎる程発展を遂げて来たのですが、特に昭

故 安田守雄名誉会長



心からご冥福をお祈り
申し上げます

会員一同

和42年国際生化学会議が東京で開催された折に、脂質生化学部門の国際会議を本会の研究会と重複させる事になり、安田先生が実行委員長を務められ日仏会館ホールで8月17日～18日の両日に亘って行いました。外国人研究者の発表が10題あり、非常に盛大でした。これも一に安田先生の御努力の結果です。また昭和49年の会報には、本会発足の頃の思出をなつかしげに書いておられますので、皆様の御一読を御願います。

その後安田先生は病気になるれ、昭和51年5月21日の総会(千代田生命講堂)において私が会長にすいせんされ、安田先生を名誉会長に推戴した次第です。

安田先生の会長は実に昭和35年から51年に及び非常に長く務めていただいた次第であり、常日頃言われていた脂質生化学研究の振興、とくに若い人々の登龍門としての役割は充分に果たしている事を安田先生に御報告申上げる次第です。

恩師 安田守雄先生を偲んで

坂 上 利 夫

恩師、安田先生が昭和56年3月4日肺炎で御逝去されてから早くも8ヶ月余が経過してしまいました。先生を悼む立派な一文が今井陽教授により生化学53巻9号に掲載されており、その中に先生の御経歴、御人柄、研究の御成果などが詳細に紹介されて居りますので私は先生と自分との繋りの中での懐しく記憶に残ることなどを書いてお偲びしたいと思います。

安田先生は昭和17年、私が未だ医学部2年に在学中、東北大学医学部に転出されました故正宗一先生の後任として赴任されました。医化学(当時)の講義は学部1年目で終わっておりましたので、安田先生からは直接講義を受ける機会はありませんでしたが、実習が学部2年の一学期にありましたので、この時に初めてお目にかかったことになります。当時は戦争の影響で卒業が繰上げられ、私共は20年3月の予定が半年早くなり、昭和19年9月に卒業となりました。卒業後直ちに10月より先生のもとで助手となり、直接の御指導を受ける様になりました。赴任当初は単身赴任でしかも未だお若かったこともあり、若い教室員や学生

と一緒にいろいろのスポーツを楽しみました。特にテニス、卓球は中々お上手で、若い頃のアメリカ留学時にアメリカ人の若い研究者を打負かした自慢話をよく聞かされました。また教室の野球チームの一員として、一番バッターでよく出塁しておられました。私が教室に入った時は日本が戦争末期を迎えつゝある時で、研究面はガスの補給が十分でないとか、有機溶媒が中々入手できないなどの理由で実験が思うにまかせない日々が続いておりました。終戦の玉音をラジオで、当時の北大医学部事務所の建物の前で先生とともにゲートルを巻いて悲痛な思いで聞いた記憶が今でも鮮に脳裏に残っております。

昭和20、21年は細々と実験を行っていましたが、冬期間は石炭不足のため暖房が通らずストーブを一室につけて僅に暖をとるという状態が続いたため、事実上の研究ストップになっておりました。先生は真冬の極寒期でも絶体に長いズボンドを着用されず、年間所謂ステテコのみで通され、一杯入った時によく脛を出して私共に見せ、若いのに寒がっている北海道育ちの私共をからかっておられました。昭和22年頃より戦地から帰還された先輩、あるいは卒業間もなくの若い人達が先生を慕って次々と集ってくる様になり、研究も資材その他でいろいろと苦勞しながらも序々に活発となってゆき、先生も意欲的に御指導される様になってきました。昭和24年に始めて論文を書き先生の御校閲を仰いだ時は、緒言は口頭で訂正され、その他の部分は達筆な文字で朱書訂正されました。清書して再校閲をお願いしましたら、またまた大幅に訂正され一篇の論文ができ上がるまで数回、校閲、訂正が繰返され、論文を書きあげることの難しさを肝に銘じました。その後私は昭和24年6月に北海道立女子医学専門学校に転出し、引続いて昭和25年より札幌医科大学に在職しましたので、従前よりは先生の啓咳に接する機会が少くなりましたが年に数回、先生の教授室をお訪ねし、また札幌医大の方にもきて戴いたりしましたし、年に一回定期的に行っておりました野球の対抗戦や忘年会などでお会いしており、それらの機会に研究上のことや私的な問題などで御指導戴いておりました。昭和33年、日本生化学会会頭として31回大会を札幌で主宰されましたが、今井(当時助教授)、大野(札幌医大教授)の両先生が丁度その時期アメリカ留学中でしたので、学会はほとんど独力で運営され会員からも好評を得る立派な成果をあげられたことを覚えております。昭和34年9月、

私がアメリカに留学する際、送別会の席上、先生から心暖る励しのお言葉を戴いたお陰で不安感が一掃され気持ちがすっかり落ち着いたものでした。昭和35年、先生がマルセーユでの International Conferences on the Biochemical Problems of Lipids の第5回会議に出席され、帰途アメリカを廻られ、ワシントンでの国際栄養学会に出席されました際、私はワシントンまでメンフィスから出かけて行き、久し振りに先生にお会いし、ホテルのバーでコニャックを一緒に飲みながら、一年間のこちらでの生活を話して、たまっていたストレスが大いに解消されました。丁度オリンピックがローマで行われている最中で、連日新聞にその成績が賑に載っていた時期でありました。一日先生のお伴をしてNIHを訪問しましたが、その際の先生の流暢な英語での討論に今更ながら圧倒されたものです。昭和36年8月末、留学生生活を終えて帰国しました所、留守の間に安田先生を中心として日本脂質生化学研究会が昭和35年10月に発足しており、私がワシントンで先生にお会いしたのが前年の9月ですから、これは日本に帰られて間もなく設立されたことになります。この年、第2回日本脂質生化学研究会が日本生化学総会と相前後して大阪で行われ、初めて参加しましたのが研究会とのつながりの第一歩でした。その時は参加者数約200名で1日の会期だったと記憶しております。この様にして安田先生が種を播かれた脂質生化学研究会も現在では2会場、2日間の会期で行われ、しかも演題数を制限しようかという所まで大きく発展してきました。日本における脂質研究の先駆者たる先生の多年にわたる御努力の成果といっても過言ではないでしょう。

心に浮ぶまま、書き列ねましたが、未だ沢山、先生への思い出はあります。しかし地下の先生に相変らずまとまりのない拙い文章だねとまたお叱りをうけることになり相なのでお許しを願い、さらに先生の御冥福をお祈りして稿を終えることにしたいと思います。

昭和57年1月6日

57年度会費払い込みのお願い

- 昭和57年度会費2,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。

本年度の講演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払い込みください。

- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口に備えつけの用紙をご利用ください。

会費送付先

振替番号 東京4-91400

日本脂質生化学研究会

- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金1,000円+昭和57年度会費2,000円=合計3,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり或いは、他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。

事務局 東京都板橋区加賀2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部第一生化学教室

日本脂質生化学研究会事務局

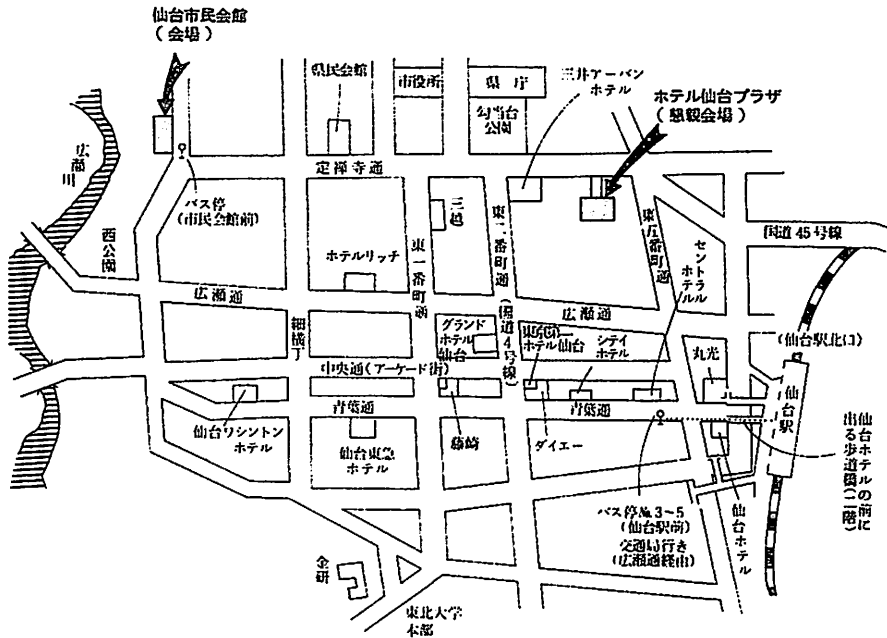
TEL (03)964-1211

内線 2320

2321

..... 今日、お払い込みください

会場周辺図



会場・懇親会場への交通

- 仙台駅より市民会館
《市バス》 乗場A3～5から広瀬通り経由交通局行き
《タクシー》 約10分 500円位
- 市民会館よりホテルプラザ
定禅寺通を徒歩約10分
- 仙台駅よりホテル仙台プラザ
《タクシー》 約5分 400円位(徒歩20分)

仙台市民会館

〒980 仙台市桜ヶ丘公園4-1
TEL 0222-62-4721

ホテル 仙台 プラザ

〒980 仙台市本町二丁目 20-1
TEL 0222-62-7111

第24回 日本脂質生化学研究会のお知らせ

- ① 場 所 仙台市民会館（仙台市桜ヶ岡公園4-1）Tel 0222-62-4721
期 日 1982年7月15日（木）～16日（金）
実行委員 金田 尚志 教授（東北大学農学部食品化学教室）

- ### ② 研究会参加費用

参加費 3,000 円を予定しています。

- ③ 懇親会

研究会第1日の発表終了後にいたします。

会場 ホテル仙台プラザ（仙台市本町 2-20-1） Tel 0222-62-7111

会費 4,000円を予定しています。

特別講演会（前夜祭）のお知らせ

来る第24回日本脂質生化学研究会に先だって、前夜祭として下記の特別講演会を開催いたしますので、多数ご参加頂き、ご討論下さるようお願いいたします。

日 時 7月14日(水) 午後2時より約3時間の予定

場 所 仙台市民会館小ホール（仙台市桜ヶ岡公園4-1） Tel 0222-62-4721

演題・演者・（座長）

- ## 1. 酸化油脂の体内循環

金田 尚志氏

(座長 今井 陽氏)

- ## 2. リポタンパク質代謝異常と過酸化脂質

内藤 周幸氏

(座長 原 一郎氏)

- ### 3. 虚血後の脳の energy 代謝異常とフリーラジカル反応開始機序

小暮 久也氏

(座長 植田 伸夫氏)

なお講演会終了後、ビールパーティーを行う予定です。

研究集会発表演題の募集

今年の研究集会は口頭発表（一般演題とシンポジウム）、およびポスター発表を予定しております。口頭発表の募集演題数は約70題で、申し込み演題数の多い場合には、ポスター発表にして頂きますので、予めご承知おき下さい。尚、本年度は、申し込み演題の審査はいたしません。

① 演題の申し込み 次の形式の発表演題を募集いたします。

(A) 一般演題

口頭発表(約60題) 発表12分 討論8分

ポスター 180 cm×120 cm 1時間の討論時間を設けます。この討論時間には、口頭発表はありません。

(B) シンポジウム 主題「過酸化脂質と生体」

発表20～25分、総合討論時間を設けます。

申込み締切 4月10日(土) 必着

② 4月13日迄に幹事会、実行委員会を中心にプログラム編成をいたします。その結果、口頭発表（一般・シンポジウム）、およびポスターのお知らせと共に予稿集用、原稿用紙をお送りいたします。尚、本年度は紙上発表のみのお申し込みは認めません。

原稿締切 5月10日(月) 必着

原稿は例年の毎く、1枚1433字詰の原稿用紙4枚とします。記入は必ず黒インクを用い、タイプでも手書きでも結構です。

尚、これも例年のことですが、原稿用紙 1 枚目の発表者所属、氏名の下に、5 行の要約を枠囲みして必ず書いてください。（昨年のお演義集をご参照ください。）

同じ教室、研究単位から複数の演題が出る場合には順位をつけてください。順位の下のものはポスター発表をお願いする場合があります。

③ 研究発表

研究発表は、講演集を十分に活用してください。スライドは講演集に記載できなかったデータ、写真などに限って使用するよう工夫してください。スライドの枚を講演時間1分につき1枚以下に制限いたします。尚、会場は講演集が読めるように明るくおこないますので、スライドはコントラストの強いものを準備してください。

④ 演題の申込み、および原稿の送り先

東京都板橋区加賀 2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部第一生化学教室内 日本脂質生化学研究会事務局

Tel 03-964-1211 内 2320

会 の 活 動 状 況

① 第23回日本脂質生化学研究会研究集会

第23回研究集会は、東大阪の近畿大学の本館で開かれた。何となくヨーロッパ城塞風の正門をはいた正面の立派な建物である。林陽教授をはじめ近隣の会員諸氏のお世話になった。

研究発表数の増加から、はじめて一部“誌上発表”の形式を採用し、会場を二会場に戻した。その目的とするところは、空間的にも会員の集りを密にして互の話を聞き、自分の意見を述べる場を作るという、本来の研究会の姿勢をとり戻すためであった。

口頭発表の演題数を制限するという或る意味での会員の権利の制限について、“誌上発表”をお願いした会員の諸兄姉からは多くの場合、ご了解が得られた。そして、そのようなご協力に対しても、是非とも充実した口頭発表と討論がなされなければならないのであったが、実際はどうであっただろうか。

確かな指標がないから、その答を正確に出すことはむづかしいが、全体の雰囲気は悪くはなかったように思う。そのことは、幹事の皆様をお願いしたアンケートの答でも“この方法(口頭発表の制限)でよい”というのが圧倒的であった。

しかし、一つ残念であったのは、口頭発表の席を得た会員の一人が、無断で(すくなくともその会場に、および事務局には何の連絡もなかった)欠席をされたことである。その会員が、本研究集会をたまたまそこにある自分の単なる研究発表の場の一つとしてとらえ、そこに出席して他の研究者の話を聞き、自分の経験を述べるという姿勢がないのだとしたら甚だ遺憾であるという以外に言いようがない。

一日目の夕刻、地下食堂に於いて懇親会が開催され、“キンダイ”にお目にかかった。外見はお世辞にも美形とはいえないが、味はすこぶる佳良であった。日本の海が“キンダイ”で埋まることを期待したい味であった。最後に林実行委員をはじめ教室員の方々の合唱で“近大の歌”を聞かせて頂いた。既に関西の大学の一方の雄を誇る大学であるが、なお新興の心意気を聞く思いであった。

② 第23回日本脂質生化学研究会総会

56年7月4日12時より第一会場で開催された。総会の次第および議事内容は次の如くである。

イ. 挨拶

原 会長

56年3月4日に亡くなられた本会名誉会長安田守雄名誉教授の功績をたえ、全員起立で黙悼を捧げた。

ロ. 昭和55年度事業報告および決算の承認の件 植田幹事

56年1月に発行された会報に記載の55年度事業報告について承認を求め拍手をもって承認された。次いで同会報記載の55年度決算報告について、舟橋会計監査提出の監査報告書が舟橋監査欠席のため原会長により代読されて承認を求めた結果、拍手をもって承認された。

ハ. 昭和56年度事業計画および予算の承認の件

56年1月に発行された事業計画および予算について一括承認を求め、拍手をもって承認された。

ニ. 新幹事委嘱の件

原 会長

猪飼 篤、石塚稻夫、鬼頭 誠、小峰仙一、矢野郁也、山本尚三の諸氏に新たに幹事をお引き受け願うことが提案され、拍手をもって承認された。

上記諸氏の同意が得られれば、57年1月1日より4年間幹事をお引き受け頂くことになる。

ホ. 第24回研究集会実行委員委嘱の件

原会長より、東北大学農学部・金田尚志教授にお願いしたい旨提案がなされ、満場一致で承認され、金田教授よりお引き受け頂ける旨、ご挨拶があった。以上議事は無事に終了し引きつづき、千田賞の贈呈が原会長により行われた。

贈呈者 西島正弘氏(国立予防衛生研究所化学部)

今後のご発展を祈る次第である。

③ 56年度幹事会

56年7月3日午後12時25分より近畿大学本館会議室で開催され、総会に提出する55年度事業および決算報告、56年度事業計画および予算案の審議をお

こなった。

また、今回の口頭発表演題数の制限の問題について意見を交換した。

更に新幹事委嘱の件が審議された。

④ 56年度在京幹事会

56年12月14日午後6時より赤門学士会館で開催された。

出席者(順不同、敬称略)

原 一郎、山川民夫、永井克孝、内藤周幸、原島圭二、赤沼安夫、赤松 稜、脊山洋石、飯田静夫、村松敏夫、金子 弘、植田伸夫、金田尚志(57年度実行委員)、島崎弘幸(事務局)

議 題 ① 56年度事業報告案および決算案

② 57年度事業計画案および予算案

③ 56年度研究集会準備状況の検討

①②については審議の上、別記のように決定され、幹事会の審議を経た上で総会に提出されることになった。56年度は赤字予算を組んであり決算も赤字となり、57年度も赤字予算が組んであり、58年度への繰り越し金が12万余円程度になったことから、58年度より会費を3,000円に値上げすることを総会に提案することになった。

③について金田実行委員より説明があり、会場、資材 ともポスターが可能であることから、57年度の研究集会ではポスター展示をおこなうことにし、56年度のような誌上发表はおこなわないことになり、口頭発表とポスター展示の二本建とすることになった。その両者の区別は審査という方法をとらずに、一つの研究単位から複数の演題が出される時には研究単位で演題順位をつけて、下位順位のもの(ポスター発表に適したものを下位順にする)をポスター展示にすることにした。また、特定の研究領域全体をポスター展示にする可能性もあり、プログラム編成の際に検討決定することにした。

またシンポジウムとして“過酸化脂質”をとり上げることが承認された。

尚、会費の収納状況ともからみ、会員名簿を作成することが承認された。

また近畿日本ツーリストから申し入れのあった国際生化学会ツアーに名前を貸

⑥ 57年度事業計画(57年1月1日～12月31日)

○ 会 員

名誉会員 賛助会員

役 員 幹事新任(57年1月1日より4年間)

猪飼 篤, 石塚稻夫, 鬼頭 誠, 小峰仙一

矢野郁也, 山本尚三 氏

名誉会長 空席

役員改選 会長, 庶務幹事, 会計監査

(58年1月1日より2年間)

○ 会報の発行

安田名誉会長追悼号 本誌である

○ 名簿の発行

○ 脂質生化学研究24巻の発行

○ 研究集会の開催

実行委員 金田尚志氏(東北大学農学部教授)

○ 千田賞選考贈呈

⑦ 56年度決算ならびに57年度予算

収 入 の 部 項 目	56 年 度		57 年 度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	1,340,000	1,304,000	1,360,000
入 会 金	20,000	27,000	25,000
賛 助 会 員 会 費	210,000	250,000	230,000
講 演 集 売 上 げ	200,000	163,400	160,000
広 告 収 入	600,000	699,600	700,000
利 子	6,388	16,103	15,000
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	0	0
小 計	2,376,388	2,460,103	2,490,000
前年度よりの繰越金	1,389,143	1,389,143	890,806
計	3,765,531	3,849,246	3,380,806

支 出 の 部 項 目	56 年 度		57 年 度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	300,000	300,000	300,000
会 報 製 作 費	160,000	152,400	180,000
講 演 集 製 作 費	1,500,000	1,403,400	1,550,000
旅 費	70,000	60,000	70,000
郵 送 料・通 信 費	500,000	704,465	550,000
事 務 用 品 費	20,000	43,050	20,000
会 合 費	100,000	97,208	100,000
謝 金	50,000	30,000	50,000
総 会 経 費	30,000	32,911	30,000
事 務 経 費	100,000	100,000	100,000
雑 費	10,000	35,000	300,000
小 計	2,840,000	2,958,434	3,250,000
次年度への繰越金	925,531	890,806	130,806
計	3,765,531	3,849,246	3,380,806

56年度の研究集会の審査制度についての アンケート結果

事務局

56年度に審査制度を導入した結果が、はたしてどうであったかは、やはり慎重に検討すべきものと考えます。そこで幹事の皆さんが一回経験した結果どのような感じをお持ちになったか、また誌上発表の扱いを受けた会員の方がどのように受けとめられたか、アンケートをお願いしました。

①幹事諸氏へのアンケート 回収 $\frac{41}{51}$

56年の体験をふまえたうえで

演題制限も止むを得なかった 32

{ 56年のやり方でよい 25
自主規制 7

演題制限はすべきではなかった 6

{ 2日間2会場を拡大する 4
発表時間を短縮する —

誌上発表、口頭発表にかかわりなく文献的価値の明確な論文集を出すことに

{ 賛成 5
反対 36 { 必要なし 23
時期尚早 11

多くの意見は56年度の演題制限に肯定の立場を表明した。

論文集の発行は他に発表機関があるのだから、早く完全論文にして発表すればよいという意見であった。

②誌上発表になった会員に対するアンケート回収 $\frac{9}{19}$

口頭発表にならなかったことに

{ 不満である 2
不満ではない 7

紙上発表に

{ 意味ありと思う 9
意味ない 0

口頭発表の制限は

{ 必要なら止むを得ない 9
会員の権利を制限すべきでない 0

制限するとしたら

{ このままの審査法でよい 3
改めるべきだ 4

(自主規制1)

回収率が悪いので早急な結論は出せないが、口頭発表の制限は止むを得ないということ、そして紙上発表に意味ありとすることに全員一致していたことは注目に値する。

Lipoprotein and Coronary Atherosclerosis" (Lugano)に参加して

東京大学 第三内科
赤沼安夫, 児玉龍彦

昨春秋, ヨーロッパで2つのリポ蛋白に関するシンポジウムに参加してきたので概要を報告する。1つはDrug Affecting Lipid Metabolism等を主催しているグループが中心になり10月1日~3日スイスのLuganoで開かれた"Lipoprotein and Coronary Atherosclerosis"で, もう1つはその直前ミラノで開かれた"Plasma Protein"のシンポジウムのLipoproteinのセッションである。ミラノの会議は主としてヨーロッパの研究者のみの会議であった。注目されたのはUtermannらのApo Eの遺伝に関する詳細な研究でⅢ型高脂血症はApo EのisoformのE^d alleleのhomozygoteにおこり, 発症のためには何らかのtrigger factorが必要なことを証明していた。その後のSchneiderらの仕事とあわせ, Ⅲ型の基本的病因はほぼ解明されたといえよう。

Luganoのシンポジウムでも注目を集めたのは, Apo B・E receptorとApo Eに関してで, MahleyらのグループからInnerarityがApo E receptorについて, ダラスのグループからSchneiderが, LDL receptorへのMonoclonal抗体等について報告した。これらのreceptorについての解析も, 単にその性状についてのみでなく, 代謝上の生理的意義が解明されつつありSteinbergらは, receptor以外の経路によるリポ蛋白処理について, Schepherdはコレステロール摂食時のreceptorによるuptakeの変動について, Schonfeldはglycosylated LDLの処理について, ChapmanらがLDLの構造について報告していた。

LDLの臨床的評価については, MillerらがHDL₃よりHDL₂が生成すると考え, HDL₂の重要性を強調, 他の演者は, コレステロール低値者群に癌発症率の高いこと, 又HDL高値群に, 大腸癌発症率の上昇等が報告されたが, いずれも十分な疫学的検討をうけたものとは思われず, Keysらの現在までの疫学的データではまだ不十分であり1990年頃までデータの集積が必要との見解が説得力あると思われた。

日本からは, 沼野が心筋硬塞時のmicrothrombiについて, 赤沼が, partial LCAT欠損症について, 児玉が原らの方法による高速液体クロマトグラフィによるリポ蛋白の解析について報告した。

その他の演題では, GoodmanがPDGFとLDL receptorの量的変動の関連性の解析を, Kinrunenが, 血管内皮細胞によるA-I合成を, FranscenchiniがApo A-Iミラノ患者のHDLのcross-linkingを報告していた。今回のシンポジウムでの一つの特徴は, リポ蛋白代謝の生理的条件下での解明と, 脂質代謝異常症の病態の両面の研究がからみあって急速に進歩していることであった。

第23回国際脂質生化学会(ICBL)に出席して

東大・医・第一生化
脊山洋右

1981年8月2日から5日にかけて, 第23回ICBLがデンマークのNyborgの町で開催された。アンデルセンの生れたOdenseからほど近い港町で, 静かな小さな古都である。日本からは矢野郁也, 富安郁子両氏と小生の3名が参加し, カナダから金田敏氏が来られた。

全体で150名位の会であるから, 日本の脂質生化学研究会よりも規模が小さいが, これは毎回テーマを変えて関連領域の者だけが集って討論の質を高めようという会の性格にもよるものと思われる。

今回はI. EFA, 哺乳動物に於る必要性, プール及びプロスタグランディン生合成への利用; II. 脂肪酸及びグリセロ脂質の生合成, の二つの課題が取りあげられた。招待講演10題, 口頭発表25題, ポスター発表63題の計93の演題が発表された。一会場で取って代わってポスター形式を取り入れたところに今回の特色が見られた。因に, 前々回のケルンでの会では3会場を用いて, 全て口頭発表形式をとっている。日本の脂質生化学研究会でも, 毎年のように会場数とポスター形式の可否が論じられているが, ICBLのように色々と試してみるflexibilityがあっ

ても良いのではなかろうか。その年の主催者の自由裁量に委ねるのも一案である。

会の内容に関してはプログラムを参照されたい。Abstractは上記3氏の手元にあるので興味のある方は問い合わせていただきたい。

8月3日に組織委員会が開かれ、前回及び今回の会の報告がなされ、引き続いて将来計画が検討されたので、その概容をお伝えしたい。

今回は1983年にフランスのToulouseでL. Douste-Blazyが主催することになった。本来1982年にはオーストラリアでIUBのSatelite Symposiumとして開かれる予定であったのが中止となり、又、FavargerがGenevaで開くことになっていたのも彼の引退で開けなくなった為にToulouseに急遽変更されたものである。Doust-Blazyがこの会に出席していなかったため、テーマについては決定されなかった。

第25回はベルギーのAntwerpでW. S. H. DierickとA. R. Lagrouが主催して1984年に開くことになった。これはICBLが30周年を迎えるにあたっての記念であり、本来は1983年に第25回というのがキリが良いのであるが、前述の理由で一年ずれて1984年に開かれることになった。因に、第1回は1953年にBrusselでRuyssenが開催している。

第25回ICBLのトピックとしては、(i)ホルモン信号の伝達に於ける脂質；(ii)糖脂質の代謝と機能；(iii)脂質研究における新しいスペクトル分析法、が提案された。更に、1953年の第1回大会のトピックも改めて取り上げることが決った。

その後の予定としては1985年にF. PaltaufがGrazで第26回大会を、1986年にはJ. BremerとK. R. NormがNorwayで27回大会を開くことが決定された。

これらの会の予告については、mailing listを整備して早目に関心のある者に届くようにすることと、生化学関係の雑誌に広告を行うことが討議された。日本でのCorresponding Memberは1982年から沼正作教授(京大)があたることになった。

最後に、ICBLの会長及び秘書の交代の議が討議され、会長はL. L. M. van DeenenからG. A. Gartonに、秘書はB. H. TrittenからG. Galliに受け継がれた。

I. EFA, ESSENTIALITY IN MAMMALS, POOLS AND MOBILIZATION FOR PROSTAGLANDIN BIOSYNTHESIS

Linoleic and Linolenic Acids, Essentiality in Mammals.
J.F. Mead, Los Angeles, Cal., U.S.A.

Fatty Acid Analogs Used to Evaluate Structural Determinants of Prostaglandins Synthetic Enzyme and Receptor Specificities.
P. Needleman, St. Louis, Miss., U.S.A.

Lipid Composition of the Testes of Rats Fed a Diet Deficient in EFA and Supplemented with Linoleate or Linolenate.
W.M.F. Leat and N.G.E. Clarke, Cambridge, U.S.A.

Modulation of the Prostacyclin-Thromboxane Balance in the Vascular System by EFA Acids.
E. Agradi, A. Socini, C. Colombo and C. Galli, Italy

Quantitative Estimation of IN VIVO PGE₂ Production During EFA-Deficiency and Dietary EFA-Supplementation in Rats.
H.S. Hansen, Copenhagen, Denmark.

Renal PGE Output Undergoes Rapid Changes in Response to Low Levels of Dietary Dihomo- γ -Linolenic Acid.
S.J. Kirtland, C.R. Shawyer, T. Buchanan, I. Cowan and H. Hooper, Herts, England.

Human Umbilical Vasculature Converts Eicosapentaenoic Acid

to Δ -17, 6-Keto-Proglandin F₁ α .
J. Dyerberg, K.A. Jørgensen, and T. Arnfred, Denmark.

Arachidonate Release is Coupled to Phosphatidylinositol Turnover.
P.W. Majerus, St. Louis, Miss., U.S.A.

Importance of the Lipoygenase and Prostaglandin Synthetase Pathways.
L.G. Letts, M.A. Palmer, M.J. Peck, P.J. Piper, M.N. Samhoun, J.R. Tippins* and T.J. Williams, London, U.K.

Enzymatic Coupling of Phospholipase A₂ and Prostaglandin Synthase Activities in Subcellular Fractions from Rabbit Renal Medulla.

A. Erman*, R. Azuri and A. Raz, Tel-Aviv, Israel.

Phospholipid and Fatty Acid Profiles for Highly Purified Fractions of Human Platelet Surface and Intracellular Membranes.

M. Lagarde, M. Guichardant, S. Menashi and N. Crawford, London, U.K.

Effects of the Calmodulin Antagonist Trifluoperazine on Phospholipase A₂ and C Activation and Protein Phosphorylation in Platelets.

R.W. Walenga, R.A. Hadjian and M.B. Feinstein, Farmington, U.S.A.

Preferential Utilization of Endogenous Arachidonate by Cyclooxygenase in Incubations of Human Platelets.
L. Sauterin and G. Galli, Milan, Italy.

Study on the Biosynthesis of PGE₂ and PGF₂ α in Human Amnion, Chorion, Placenta and Myometrium.

V. Dimov and N.J. Christensen, Stockholm, Sweden.

II. FATTY ACID AND GLYCEROLIPID BIOSYNTHESIS

Regulation of Fatty Acid Biosynthesis.

J.W. Porter, Wisconsin, U.S.A.

Termination Mechanisms in Different Fatty Acid Synthesizing Systems.

S. Smith, California, U.S.A.

Fatty Acid Synthetase of Guinea Pig Harderian Gland.

Y. Seyama, H. Otsuka and T. Hamakawa, Tokyo, Japan.

Identification of Fatty Acid Synthetase Messenger RNA on free Ribosomes from Lactating Rabbit Mammary Gland.

M. Antoniou, R.K. Craig and R. Dils, U.K.

Fatty Acid Synthesis in Goat Mammary Gland. Synthesis of Acyl-CoA's by Fatty Acid Synthetase.

J. Knudsen and I. Grunnet, Odense, Denmark.

The Effects of Cerulenin on Lipid Metabolism IN VITRO in Cellular Preparations from the Rat.

W.W. Christie, M.L. Hunter and R.A. Clegg, Ayr, Scotland.

The Influence of Temperature

and Environmental Salinity on the Pattern of Fatty Acid Synthesis in the Gills of the European Eel (*A. Anguilla*).

H.J.M. Hansen, Risø, Denmark.

Regulation of Glycerolipid Synthesis.

D. Saggerson, London, U.K.

Interaction of Organelle Systems in the Synthesis of Fatty Acids and Lipids in Plant Cells.

P.K. Stumpf, B. Liedvogel, T. Shimakata and K. Hilt, California, U.S.A.

Reconstitution of Partially Purified SN-Glycerol-3-Phosphate Acyltransferase from Escherichia Coli.

J.M.M. Kessels and H. van den Bosch, Utrecht, The Netherlands.

Fatty Acid Synthesis in Mammary Gland. Direct incorporation of "de novo" Synthesized Medium Chain Fatty Acids into Triacylglycerol.

I. Grunnet and J. Knudsen, Odense, Denmark.

The Synthesis of Dipalmitoylphosphatidylcholine in Rat Lung.

G.P.H. van Heusden, Utrecht, The Netherlands.

Ultrastructural and Biochemical Characterization of Two Populations of Rat Hepatocytes Isolated from Ethanol-Induced Fatty Liver.

B. Bro, N. Grunnet, J. Kondrup, J. Dich and H.I.D. Thieden, Copenhagen, Denmark.

Compartmentation of Membrane

Diacylglycerols.

L. Binaglia, R. Roberti, A. Vecchini and G. Porcellati, Perugia, Italy.

Hepatic Uptake and Utilization of Long Chain Fatty Acids: Role of Fatty Acid Binding Protein (FABP) and the Putative Cell Surface Albumin Receptor.

R. Ockner, R. Weisiger, J. Gollan, D. Burnett and M. Kushlan, San Francisco, U.S.A.

Synthesis of Very Long Chain Fatty Acids.

J.L. Harwood, Cardiff, U.K.

Biosynthesis of (n-9) and (n-7) cis-Monounsaturated Fatty Acids in Maturing Seeds of Sinapis Alba.

K.D. Mukherjee and J. Kiewitt, Münster, Germany.

Biosynthesis of Esterified Alkan-2-ols.

J.D. Mikkelsen and P. von Wettstein-Knowles, Copenhagen, Denmark.

Biosynthesis of Mycolic Acids using Stable Isotopes and their Temperature Induced Changes in Acid-fast Bacteria.

J. Tomiyasu, S. Toriyama, I. Yano and M. Masui, Osaka, Japan.

On the Characteristics of Fatty Acid Binding Proteins.

F. Spener, G. Jagschies and N. Haunerland, Münster, Germany.

Fatty Acid Transport in Yeast. S.D. Kohlwein and F. Paltauf, Graz, Austria.

1983: 24th ICBL, Toulouse, Prof. L. Douste-Blazy

1984: 25th ICBL, Antwerp, Prof. W.S.H. Dierick and Prof. A.R. Lagrou

1985: 26th ICBL, Graz, Prof. F. Paltauf

1986: 27th ICBL, Norway, Prof. J. Bremer and Prof. K.R. Norum

西ドイツ訪問と血小板活性因子の合成のこと

東京医科歯科大学教養部

村松敏夫

1981年9月16日、西ドイツ北西部にある人口25万人の大学都市Münsterに着いた。Münster市を訪れたのはBundesanstalt für Fettforschungがあり、所長として第20回(1978年)、本研究会の前夜祭でエーテルリビッドの講演をされたProf. Mangoldが居られるので、エーテルリビッドの取扱い方、物理、化学的性質について勉強してみようと思ったからである。幸い文部省の在外研究員という立場であるので、先方に研究費以外は御迷惑をかけずにすむので、この際思う存分に見たり聞いたりするつもりで出掛けた。研究所は日本のそれとはイメージ大変異なる建物で、西洋お屋敷とでも云うか、かつてのKaufmann所長の威風を感じるものである。さて、所員の仕事ぶり、生活ぶりは、アメリカでの感じと全く異り、一口に云えば日本のふん囲気である。仕事のレポートリが広く、その割に人が少いため各人が独立したテーマを持っていることと、西洋人風の個人主義のせいだらうか、何か全体がバラバラの感じがしたし、その上議論好きな国民性と合いまって、時には腹が立つような非能率を感じた。また一方で、私の抱いていた今や古き時代のドイツ人のイメージに合う少数のテキパキ型所員と、古くてもしっかりと作られた実験機器、整とんの行きとどいた実験室には大いに好感を持ったが、全体としてみれば、いずこも同じで……の印象であった。こゝで私事や、私の行った実験について書かせてもらう。これまで本研究会でリン脂質の合成に関する仕事をボツリボツリと報告して来たのであるが、仕事に関する限り孤独を感じ、現在もそのように思っている。考えてみれば当然であって、生化学の先生方にとっては、もはやメンドウな合成をやる時代ではない。少々お金をフンバツすれば5年前と比較にならないほどの豊富な種類と高純度の脂質が入手できるので、合成に関心ナシも当然である。一方合成法にしても、確立するだけ確立しているし、改良法といっても、たいいてタン白質、核酸、糖質化学の物マネごとであって、合成法そのものにウマ味もない。だから正直のところ本人もアキアキなのである。それで10年前アメリカのHormel研究所に居たとき、Mangold

氏の弟子で、Prof. Schmid(生化学)の下で行ったエーテルリビッドの生合成のことや、同じ弟子のProf. Baumann(化学)に教えてもらった化学のことを、このアキアキの数年来考えていたのである。一合成屋に他の活路はないか?、合成なんぞ止めよう、といっても生化学のような複雑なナゾ解きは……等々と。それで、Mangold氏のところに足を向けることになった。彼はプラスマローゲンやエーテルリビッドの分析では第1人者であるばかりでなく、私にとって彼が同じ化学屋であるということである。そして彼が現在何を考え、これから、先をどのように考えているのか少しでも聞いてみたいと思ったからである。ともあれ、研究所に登城した日、Mangold氏から血小板活性因子(PAF)の合成に助力を求められたときは、すぐに決心がついた。何よりも私にとって、合成したものが目に見える現象としての生理活性を示してくれるというのがウレシイことである。このとき、10年前のHormelでProp. Sprby(現ノルウェール在)がリン脂質の血液凝固に関する仕事をし、van Deenen, De Hassの文献と比較していたことを思い出した。さてMangold氏は、1年ほど前からRat fish liver oil(サメ肝油、彼はすでに10数年前に分析を行い報告している)を原料にしてPAFを合成することを思いついたそうであるが、化学屋がいなかったせい(?!), ともかくアイデアを暖めていたそうである。“お前を待っていたぞ”の甘い言葉に、自分の仕事(日本からの)と併行するという約束で約8ヶ月、比較物質の合成と併せて取組むことになった。2ヶ月ほどして、極めて遠慮がちに“何が出来たかい?”と初めて仕事のことを聞かれたとき、出来るには出来たが収率が悪く、高いものにつくので困っていると答えたら、“出来れば良いではないか”の一言に、カーツと来て、つい、“おれは、良いものを早く、たくさんそして安く作る方法が見つかるまでは出来たとは云わない!”つぶやくような“Och Japaner!”と小さな一声を残して引上げて行った。がこの見栄の後始末に苦勞したことは云うまでもない。あと2ヶ月を残すというある夕方、合成品とデーターを持って彼の部屋で報文の打合せを行った。2gの肝油より出発、6ステップ、平均収率85%、各ステップ連続で精製の必要なし、目的物350mg、所用時間は1時間、不飽和アルキル鎖化合物の合成、H, C, Nラベル可能……等々。“何!”しばらくして手をとって彼が云った“ドイツも安くて、丈夫な車を能率よく大量に生産すれば日本

車の輸入は自然に止まる、ナそうだろう？” 今度は私がつぶやいた “Och、
Japaner、” それから2週間後、依頼した生理活性の報告を受け、2人でシャン
ペンならぬ冷めたコーヒーをガブ飲みしながらドイツ特許の申請について話をし
た。笑いながら彼が云った。 “お前の酒の飲めないことだけが気に入らぬ、”
他人様にはわからぬ私の久々のウッブン晴しであった。

International Symposium on Atherosclerosis のお知らせ

1982年6月14-18日に西ベルリンで国際動脈硬化シンポジウムが開かれる
予定です。またこのシンポジウムに出席が予定されている方を中心に、オスロ市
で「ACAT and other intracellular aspects of sterol metabolism」
に関するサテライトシンポジウムが開催されます。

問い合わせ先

Prof. Kaare R. Norum

Institute for Nutrition Research

School of Medicine

University of Oslo

P. O. Box 1046, Blindern

Oslo 3, Norway

又は 遠藤 章氏 東京農工大

(Tel 0423-64-3311)

International Conference on Oils, Fats and Waxesのお知らせ

標記集会が1983年2月13-17日にニュージーランドのオークランドで開催
されます。一般演題の締め切りは1982年7月31日ですが詳細は下記へお問い
合せください。

Mr. S. G. Brooker

International Conference on Oils and Fats,

Chemistry Department,

University of Auckland,

Private Bag, Auckland,

New Zealand.

求む バックナンバー

国会図書館より、脂質生化学研究のバックナンバーを贈呈して欲しい
と申し出がありました。

事務局在庫分は贈呈しましたが以下のバックナンバーの在庫がありま
せん。若し手許におありで提供してもよいという方がありましたらご連
絡ください。 1964, 1969, 14, 15, 16, 19巻

事務局

編集後記

会員数が増えて、会報や講演等の発送作業が大変な手間になって来た。そこで宛名書きをしなくてすむように、コピーして貼付できる方式にした。その整理が一仕事であった。

その段階で、もう一度会員であることを確認する必要が生じ、急に名簿を作る作業をすることにした。これもまた一仕事である。

しかし、それでも100名余は、今後会員であることを続けるとも、退会するとも返事をくれていない。往復葉書の復を出してくれないのである。

その人達を名簿からはずしてもよいのだが、明らかに会員であるはずの人も含まれているし、仮に50人の名が抜けた会員名簿は価値がなくなってしまう。扱われる仕事である。

東京、今年は暖冬です。

(事務局 記)

オーストラリアへ行きませんか

別冊の如き国際生化学会出席ツアーを企画しました。別冊内容に加えて香港のバスツアーなどもサービスされる模様です。

植田 伸夫

(別冊および本記事は広告で、広告収入が得られ会報作成費の一部に当てられます)

賛助会員 (50音順)

エーザイ株式会社

株式会社大阪細菌研究所

株式会社大塚製薬

小野薬品工業株式会社

共立出版株式会社

三共株式会社

塩野義製薬株式会社

株式会社資生堂

住友化学工業株式会社

第一製薬株式会社

大日本製薬株式会社

株式会社東京化学同人

東京田辺製薬株式会社

富山化学工業株式会社

株式会社中山書店

日本新薬株式会社

日本凍結乾燥株式会社

日本ルセル株式会社

藤沢薬品工業株式会社

株式会社ヤクルト本社

山之内製薬株式会社

留印乳業株式会社

以上22社